抗日パルチザン参加者たちの回想記

訳　鈴木　武

明けてくる明日のために（特選集10話）　リ・ヨンスク　2
熱い心臓（特選集21話）　キム・リョンヨン　10
〈トルチ〉に関する話（7巻16話）　ファン・スニ　17
ウァンウグの人民（3巻14話）　キム・ギャリン　23
不屈の闘士（特選集6話）　リム・チュンチュ　31
任務を遂行するまで（特選集20話）　チャン・サンリョン　44
燃える復讐の一念で（6巻15話）　パク・ソンウ　58
我々はこのように武器をとった（9巻8話）　リ・ヨング　67

明けてくる明日のために（特選集10話）

リ・ヨンスク

一九三九年九月にあったことである。

北満の九月といえば朝夕冷たい風が吹く初冬である。

私たち縫衣隊〔裁縫隊〕はその時部隊から冬服を作るようにという戦闘的任務を与えられた。

五名で構成された私たち縫衣隊はヨハ県スパサンヂュ付近の密営に向かって出発した。私たちには手回しミシン一台と服を作る粗織りの木綿、綿、水を入れるブリキ缶、そのほか粗末な生活器具があった。私たちはそれをまとめて担いで密林の中に入っていった。

私たちは後ろに険しい山がそびえ、前に小さな小川が流れる樹林の中の平らに広がったところに落ち着いた。

私たちは寝られる二つのテントを張り、その間に焚き火を焚いた。

私たちの責任者はウァン・プグァンという中国のトンムだった。彼と年配の中国の男のトンムがもう一人いたが、男のトンムたちは部隊の連絡と後方活動を受け持った。女性のトンムは私を含めて皆で三名だった。そのうちの一人はウァン・プグァンの妻で、もう一人はウ・イチンという十八歳の若い中国の娘だった。私たち女性トンムは服を作る任務を引き受けたが、女性たちに対する責任は私が負った。

私たちは夜が明けるや仕事を始め、針の先が見えなくなるまで服を作った。ウァン・プグァンの妻は裁断をし、私は裁縫をやった。ウ・イチントンムは綿を刺し縫いしてボタンの穴を作った。

一日中この仕事をすると腰がずきずき痛み、指先が痛んだ。しかし私たちは痛さをこらえて夜も仕事をしなければならなかった。

その時私たちには灯をともす油がなかった。そこで夜には主に白い木綿に保護色を染めてそれを乾かして伸ばす作業をした。

布に色を染めるために私たちは半〜一里離れたところに行ってチョウセンヒメツゲ、カシワの木の皮をはいで小さなブリキ缶に入れて煮た。それからその液に白い木綿を入れて沸騰させた。ここは深い山奥なので朝夕かなり冷え込んだが、ハエぐらいの大きな蚊が多かった。蚊はまだ暗くならないうちから皮膚にたかっては血を吸った。私たちは蚊に付きまとわれて余計に疲れた。

食事といったらかぼちゃとかぼちゃのつるを煮た汁だったが、それさえ腹が満たされるほどには飲めなかった。そのうえ燃え盛る炎の前に立つと汗が全身から流れ出すようだった。空腹で足がぶるぶる震え、気がぼうっとなって目の前が真っ暗になったりした。

しかし私たちは一歩も退くことはできなかった。明るくない焚き火の前で布に色を染めるので、下手をすると貴重な布を焦がしたり、まだらになってだめにしてしまうかも知れない

からだった。私たちの遊撃隊員が血を流して敵と戦って手に入れたり、人民が食べるのも惜しんで貯めた金で買って遊撃隊に送ってきた布であることを考える時、私たちはどうして一瞬でも辛い仕事だと考えたり、些細な不注意でこんなに大事な布をだめにしてしまうことができようか！　私たちは気を引き締めて仕事を急いだ。

ある日の晩ウァン・プグァンの妻は、私たちと一緒に木綿に色を染めているうちに気を失って焚き火の中につんのめった。

この時ウ・イチンがすばやく彼女を助け起こした。下手すれば大変なことになるところだった。

しかし我々は手を休めなかった。互いに骨の折れることを我先にやろうと考えた。

冬は鼻先まで迫ってきているので、一時も早く部隊のトンムたちに服を作って送らなければならないという一つの思いで、私たちはあらゆる苦しさに耐え抜いた。その後私たちにはかぼちゃのつるさえなくなった。空を覆う密林の間から冷たい晩秋の風が吹いてきた。

「来るという歳月はいつ来るのかしら?」

ウァン・プグァンの妻が寒い冬が迫ってくるのを感触したのか、ため息をつきながらそっと言うのだった。

私は彼女がそんなことを言うかも知れないと予想していた。

元々彼女の夫であるウァン・プグァンは偽満軍にいた。私たちの遊撃隊の活動によってどの道が正しいのかを悟ったウァン・プグァンは妻と一緒に遊撃隊に移ってきたのだった。

私は党員だった。だから彼女を党的に正しく教育しなければならないと決心した。

「いつもかぼちゃの汁だけで我慢しましょう。良い世の中はきっと来るわ。今日私たちが食べるかぼちゃの汁は明日の白いご飯になるのよ。それで私たちはその日のために闘っているんじゃないの?!」と話を始めた私は、彼女に私たちが遂行する革命の勝利を確固として信じられるように多くの話をしてやった。

そして何のためにこのような艱難辛苦を顧みずに闘わなければならないのか、朝鮮人民や中国人民、特に私たちのような無産階級が味わう苦しみの禍根はどこにあるのかを話しながら、私は私が遊撃隊に入隊するようになった話もした。

私の父は日帝の〈討伐隊〉の奴らに無惨に虐殺された。その後私はウァンスピョンの谷間の密林で縫衣隊としてやはり冬服を作っていた。その時私たちの縫衣隊は全部で五名だったが、皆女性だった。

そんな一九三六年十月だった。敵の不意の襲撃によって私たちは奴らに逮捕された。奴らは私たちを監獄に監禁してひどい拷問を加えた。しかし誰も遊撃隊の秘密をしゃべらなかった。拷問では到底秘密を探り出すことはできないと悟った奴らは、私たちを監獄から出して城の中から出られないように監視した。奴らは私たちをだまして秘密を探り出そうとした。私たちが逮捕されてからおよそ一年になる一九三七年七月、私たちは城の外に脱出するのに成功した。城の外には野菜畑を耕しながら一人で暮らしている中国人の老人がいた。私たち

はその老人のところに行って助けてくれと言った。私をじっと見た老人は、「朝鮮人だね。遊撃隊を探しているのかね？」と言って私たちの顔を注意深く探るのだった。私たちがそうだと答えると、彼はためらいなく道案内をしてくれ、自分についてくるようにと言うのだった。

私の体が極度に衰弱して疲れているのに気付いた老人は、私の赤ん坊まで負ぶってのっしのっしと歩いた。彼は二里半を超える道を歩いて、私たちをノベコウという谷間にある反日会の会長の家に連れていった。ここで遊撃隊がいるところを知ったその老人は、再び私たちを部隊まで連れていってくれた。

その時軍長だったチェ・ヨンゴン同志は、私たちをどんなに喜んで迎えてくれたか知れなかった。そしてその老人に家に下りていかずに部隊に留まりなさいと勧めた。それは老人が私たちをこっそり遊撃根拠地へ送り届けたということを敵が知ったら、彼を銃殺してしまうということを、軍長同志はよく知っていたからである。

部隊に留まると約束した中国人の老人は、家に行って家財道具をおおよそまとめて持ってくると言って下りていった。しかし残忍な敵はその老人を逮捕し、遊撃隊を助けたという罪で無惨に虐殺してしまったのである。

その次の年の十二月私は乳飲み子を人に預けなければならなかった。

私の話に耳を傾けて聞きながら穴の開くほど私を見つめていたウァン・プグァンの妻は、私の手をぎゅっと握りながら涙を流すのだった。彼女の涙は自分の意志が余りにも弱かった

という反省の涙であり、同時に新たな決意を固める涙でもあった。しばらくして彼女は興奮して言うのだった。

「分かりました。私はヨンスクトンムが何のためにそのように闘うのか分かりました。私たちは子供たちにまでそんな不幸を抱えさせてはなりません。私たちは朝中人民の共同の敵日帝を追い出すために最後まで闘わなければなりません。私たちは勝利するでしょう。本当に新しい日が明けてくるでしょう」。

その次の日の朝だった。いつもウ・イチンや私より遅く起きていたウァン・プグァンの妻は、薄暗い明け方に起きて食事の準備をするのだった。そして彼女はいっそう機嫌よく働き始めた。私たちの仕事は日が経つほどいっそう緊張していった。気候が寒くなる前に冬服を一日も早く作って部隊に送らなければならないからだった。

私たちは夜には焚き火の横でほとんど眠らずに仕事の手を早めた。

私たちがここに来てから一と月が過ぎたある日の朝だった。私は普段の日より早く目が覚めた。私たちは互いに他のトンムたちを少しでもよけいに休ませようとしていたのである。私が眠りから覚めて食事を作ろうと小川のほとりに行ったのはまだ薄暗い時だった。その瞬間向こうの方から木の枝が折れる音が聞こえてきた。

私はひょっとしてウァン・プグァンと男のトンムが部隊に行って帰ってきたのではないかと思った。私は息を殺してそちらをじっと見つめた。

次の瞬間私は驚かざるを得なかった。薄暗闇の中を明らかに黄色い服を着た日本の奴らが近づいてきているではないか！

私は急いでテントに走っていきながら叫んだ。

「敵よ！」

私のこの切羽詰った声に驚いた二人のトンムはぱっと飛び起きた。私は彼女たちを先に逃がそうとした。もしも敵とぶつかるようになれば皆が犠牲になるかも知れないからだった。私は敵に発見されないようにまずテントに人間がいた痕跡をなくそうとあせった。

ところが私の行動を探っていた彼女たちは、自分たちがやるから私に先に逃げろと言うのだった。

「ヨンスクトンム！　あなたは私たちよりももっと革命に大事な人間です。早く逃げてください…」と言ってウァン・プグァンの妻は私の前を遮った。

「いいえ、私たちは皆大事なのよ。私には銃があるけど（私はその時拳銃を持っていた）、あなたたちには銃がないじゃないの？　さあ、こうしている時じゃないわ。早く逃げて…」と言って断固とした態度を取った。

実際私の心情は命を賭けて彼女たちを救いたかった。このような心情は彼女たちもやはり同じだった。　私たちは敵が鼻先まで来ているのにそれ以上ぐずぐずしていることはできなかった。

私は命を賭けて守り抜かなければならない裁縫機を抱えた。ウァン・プグァンの妻は作った服と綿を風呂敷に包んで持ち、ウ・イチンはそのほかの物件をまとめて持って先に立った。私たちはテントの後ろに逃れて険しい裏山に這い登り始めた。

私は荷が重くて走ることができず、木の枝に引っかかってしょっちゅう転んだ。

事態は非常に危急だった。私は裁縫機をすぐに倒木の下に隠しながら、一方でトンムたちを早く山の上のほうへ避難させた。

私は装弾をした拳銃を抜いて、敵とぶつかったら闘う戦闘態勢を整えては、奴らの目につかないように後ろに駆け登った。ちょっと安全そうなところで私たちは密林の間から奴らの行動を探った。敵は私たちのテントを発見した。奴らはテントを探り、テントに火をつけながら四方を騒々しくひっくり返した。奴らは四方に向かってやたらに銃を撃った。

テントが火に包まれて燃え上がるのを眺めて立つ我々の心臓は敵に対する憎悪で高鳴った。

奴らはテントに火を放っては、銃剣を逆立てて、人間が隠れそうなところをくまなく探し始めた。私たちははらはらした。それは何よりも部隊に送らねばならない冬服と綿をテントの前の小川の向こう側の岩の隙間に隠しておいたからだった。

冬服を命を賭けて守り抜かなければならなかった。私は決心した。もしも奴らがそっちの方を探し始めさえしたら、銃を撃って奴らをこちらの方へ誘導する積りだった。そこで私はトンムたちをさらに避難させた。ところが幸いにも奴らは私たちが隠しておいたところには

近づかなかった。奴らはわいわい騒ぎながら探し回っては、何も得るものがなかったのか、ばらばらに集まって下りていった。

テントは灰になり、汁を沸かしていた鍋やアルミの器はめちゃめちゃになってしまった。奴らはそれらに八つ当たりをしていったのである。

急に曇り始めて薄ら寒くなった空からはしまいにボタン雪が降り始めた。

しかし私たちは少しも落胆しなかった。かえって敵に対する燃えるような敵愾心で体には力がいっそうみなぎった。

私たちは奴らが踏みつけてだめにした鍋やアルミの器を石で叩いて伸ばして食事の準備をした。

この日の夜も私たちは赤々と燃え上がる焚き火の光に互いの顔を照らされながら、明けてくる明日について語り合った。

熱い心臓（特選集21話）

キム・リョンヨン

キム・イルソン同志の戦略的方針によって我が遊撃隊が大部隊活動から小部隊活動に移行した一九四一年頃のことである。

その時我々の小組はニョンアン県ヘルランホに宿営地を定めていたが、一度は日帝軍警の奴等が我々の宿営地を包囲した。

奴等は雪が深くて我々のいる山の上には這い登ることができずに「遊撃隊を飢え死にさせる」と言いながら山の下で何日も監視ばかり強化していた。我々の小組は敵のこのような包囲の中で五～六日を過ごした。唯一の食糧だったねぎの葉と白菜の葉までみな食べてしまったのでそれ以上そのまま留まっていることはできなくなった。そうかと言って下手に山を下りて行ったり包囲を突破しようとして我々の位置と力量を敵に暴露させることは一層危険なことだった。

このような時にチャン・ボクトンムとウァントンムが食糧工作に行こうと進み出た。

しかし小組の責任者は二人を自分の位置に戻してしばらく待たせてから夜が更けるのを待った。そして雪の中をかき分けて下りて行った彼は、敵情を更に細心に研究して通路を確定した。それから二人のトンムを食糧工作に派遣した。「…トンムたちは食糧工作で特に次の事項に留意しなければなりません。それは敵に会っても極力戦闘を避けながら絶対に人員の損失を出してはならないということです。そして人民から食糧を購入する時にもその家に食糧が十分にあるかを確認してから買うようにしなければなりません…もちろんトンムたちがみなよく分かっている問題ですが、もう一度強調するのです。…」

そう言いながら小組責任者はさらにしばらく彼らが行動すべきことを細かく指示してやり、

万一の場合を考慮して予備の通路と連絡場所まで指摘してやった。

トンムたちは小組責任者の注意事項を銘心しながら、奴等の監視と包囲を無事に抜けて五里離れた部落に到着した。その部落は我々遊撃隊が何度も敵を退けたところで、革命大衆が多い部落だったが、二人のトンムは自分たちが遊撃隊だということを表に出さずに普通の通行人に変装してから金をやって米を購入した。そして彼らが部落を出発したのはその次の日の夕方だった。彼らは急いで戻ってきたかったが、小組責任者の指示を一層銘心しながら敵を避けて夜になるのを待ち、わざと遠回りをして歩いた。

しかし敵の狂暴が極度に甚だしかった時だったので、彼らはある樹林地帯で敵と遭遇するようになった。

暗がりを利用して急いで身を避けたが、追撃してくる敵がむやみに撃つ銃弾でウァントンムは足と肩を負傷した。

チャントンムの肩を借りながら奴等の射撃圏内から脱出して山の尾根に登った時には、ウァントンムは傷のひどい出血のためにそれ以上歩くことができなくなった。その上寒さはひどく雪は深く、ウァントンムの苦痛は甚だしくなった。しかし彼は自分の傷の苦痛よりも任務の遂行を遅らせることが一層心配だった。

「ウァントンム！　あまり心配することはないですよ！　さあ私の背中につかまって！」

このように泰然として言いながら自分の上着を脱いでウァントンムの傷口をさらに包んで

やって慰めはしたが、チャントンムもやはり胸がしめつけられた。
チャントンムはウァントンムが味わう苦痛が何か自分のせいのように思われて、一人心の中で泣きそうになりながら彼を背負い、米の巾着二個を首にかけて深い雪をかき分けながら歩き始めた。
しかし初めから背負われるのを嫌がっていたウァントンムは、わずか数歩も行かずに下ろしてくれと駄々をこねた。そして彼はとうとうチャン・ボクトンムの背中を押しのけて雪の上にばさっと落ちた。
「一時も早く持って行かなくてはならない食糧じゃないですか、チャン・ボクトンム！…早くトンムが先に行って食糧を渡してください！　僕はしばらく休んでから這ってでも後からついて行くから。…」彼からこんな思いがけない言葉を聞いたチャン・ボクトンムは、どきっとした。「ウァントンム、何を馬鹿なことを言っているんですか！　トンムなら僕をここに置いていくことができますか？　さあ！　早く背中につかまって！」
互いに押したり引いたりするうちにまたいくらかの時間が流れた。ついにチャン・ボクトンムは彼をつかんで起こしながら背中を向けた。しかしウァントンムはチャン・ボクトンムの背中を押しのけながら背負われようとしなかった。
「チャン・ボクトンム、だめです！　ちょっとの距離ではない五里の雪道をどうやって僕を負ぶったままで行けますか。そんなことをせずにトンムは一時も早く先に行ってトンムた

ちに食糧を渡してください。」
　ウァントンムを負ぶって行けば遅くなるのはチャン・ボクトンムももちろんよく分かっていた。しかし革命の戦友であり、まして重傷を負った彼を後に残しては一歩も進むことができなかった。骨が砕けることがあろうとも負傷者を負ぶって行かなければならなかった。彼は自分の首に巻いていた絹の襟巻きをほどいてウァントンムの腰をしっかりと縛ってから食糧の袋を首に掛けて、ウァントンムをむんずと背負って襟巻きをぎゅっと締めた。それからはウァントンムが何を言っても彼は応対せずに歩き続けるだけだった。ただ彼の手だけが背中に負われたトンムの体をあちこち探りながら彼の傷口が凍らないようにしようとしきりに動くばかりだった。
　二人の重さで雪道をかき分けながら歩くチャン・ボクトンムの体は一歩歩むたびに深い雪の中に腰まで沈んだ。そして首に掛けた食糧の袋が胸の下にしょっちゅう垂れ下がった。しかしチャン・ボクトンムはウァントンムがわがままを言わずにおとなしく背負われているだけでもありがたいと思い、彼の温かい体温が自分の背中に伝わるのが、まるで自分が幼かった時節に弟を負ぶってやったことのように感じられた。
　曲がる腰にしょっちゅう力を込め、また前に垂れる首をしょっちゅう後ろへ反らしたりしながら彼は一度も休まずに山を一つ越えた。
　ところがこの時背中に負われたウァントンムは、チャン・ボクトンムの両肩をつかんだま

まだんだん昏睡状態に陥っていった。寒くて苦しい中でも背中に負ぶった戦友の息の音一つ聞き逃さずに歩いていたチャン・ボクトンムはこれにすぐ気がついた。

彼は自分の激した感情をぐっと抑えながらただ戦友を救おうという一念で休まずに引き続き雪道を歩いた。このようにしばらく歩いていた彼は、だんだん足の力と手の力がなくなっていき、背中に負ぶった負傷者の体重が力に余るようになっていった。それに加えて激しい吹雪と腰まで埋める雪道は、しょっちゅうチャン・ボクトンムの体をぶっ倒そうとした。

そのたびに彼は自分が倒れてはならないし、時間を遅らせてはならないと自身を鞭打ちながらさらに息せわしく歩みを移した。しかしだんだん彼の力が尽きていくのはどうしようもなかった。

彼の目の前は火がついたようで、喉からは籾殻をいぶす時に出る鼻をつくような臭いがして、手足の感覚はほとんどなくなった。

しかし彼の強い責任感と同志に対する熱い友愛の精神だけはいささかも衰えなかった。彼は思わぬ瞬間に目の前が真っ暗になってばたっと倒れたりした。雪の中に埋まった彼の顔が冷たい雪の感触を感じるやいなや、心臓からは小組責任者が言った言葉がよみがえった。

…人員の損失を出してはならない！　同志を救わなければならない！

火のように熱い欲望が彼を立ち上がらせた。

彼はウァントンムの凍り付いた手足をさすってやり、また彼の両足を自分の懐に入れてほ

ぐしてやってからしばらく走ったりした。そうしながら彼が最後の山の中腹にさしかかった時だった。

チャントンムは再び目の前が真っ暗になって目に火が漂いながら雪の中にばたっと倒れた。彼が再び気を取り戻した時に背に負われていたウァントンムも雪の中に体を突っ込んだままおし黙っていた。

「あっ!?」

チャントンムは急いで頭を上げて腰の紐をほどいてからウァントンムをさすってやり、彼の手足を自分の懐に入れてみた。しかししばらく前まで感じていた温かい感触はなかなかよみがえらなかった。革命の同志を失ってはならないというのが彼の心の全てをとらえた一つの信念だった。

彼は自分の手足が凍りつくのを考える間もなくウァントンムをさらに力をこめてさすってやり、懐に入れながら彼を救うのに全力を尽くした。

しばらく後に再び彼を負ぶって立ち上がったチャン・ボクトンムは、吹雪の中をかき分けながら山の尾根を最後まで這い登っていった。一歩一歩が力に余り、目の前はしょっちゅう真っ暗になったが、ウァントンムがある程度意識を回復して自分の両肩をぎゅっとつかんでくれるようになったことが嬉しくて、彼はウァントンムの両方の足が凍らないように引き続きさすりながら吹雪を突き抜けて登っていった。彼は夜が明ける頃にやっと小組責任者が指

摘してくれた予備の通路を経て負傷者を負ぶって食糧の袋を首に掛けたまま密営地に着いた。
同志たちがわっと駆け寄ってチャン・ボクトンムを抱きしめ、彼の背中からヴァントンムを抱き下ろし、首から食糧の袋をはずすまで彼はその場にまっすぐに立っていたが、彼はそれ以上耐えられずにその場に倒れてしまった。
チャン・ボクトンムが同志たちの手を借りて立ち上がった時、そのそばに横になっていたヴァントンムも意識を回復した。そして小組責任者と戦友たちの視線とともにチャン・ボクトンムを眺める彼の両目からは熱い涙が流れていた。

〈トルチ〉に関する話（7巻16話）

ファン・スニ

一九三七年三月私が属していた朝鮮人民革命軍四師部隊は、ソガン会議で提示した祖国進出に関するキム・イルソン同志の方針に従ってムサン地区に進出するようになった。
祖国に進出するというこの消息は全ての部隊成員たちを限りなく興奮させた。
私たち女隊員は部隊のトンムたちに新しい服を着せて祖国の地を踏ませようという一心で昼夜なく針縫いの手を急がせた。
行軍しながらでも針縫いをしたし、一晩休んでいくようになった時にも木の皮を剝いで服

を染めた。
このようにして一九三七年五月トゥマン江の上流を越えて祖国の地を踏んだ時にトンムたちは皆新しい軍服に着替えるようになった。
寝ても覚めても恋い慕った祖国の地に入った私たちの喜びは限りなかった。
祖国の山川、草木それらの全てが私たちを喜んで迎えてくれるようだった。
しかし祖国は日帝の奴らに踏みにじられており、人民は苦役と飢えに苦しめられていた。
私たちはトゥマン江を越えて山奥のある小さな村に立ち寄るようになった。多分そこはホンアムドンだったと思う。
村といってもつぶれかかった家が十余戸あるかないかという程度で、それも横になれば天井から星の光が流れ込むような野宿とさして変わらない家々だった。
畑といえば急な山のふもとに手のひらぐらいの畑の区画がちょっとあるだけで、それも燃えた木の切り株や岩で穀物の根が張る場所も満足にない程度の焼畑だった。
このような焼畑に頼って生きる村の人たちの生活状態というのは実に悲惨だった。
祖国の懐に抱かれたうれしさは言うまでもなかったが、貧しい人民の生活を見るのはとても胸がうずき心の痛むことだった。
しかし人民はそのひどい貧しさの中でも隣近所人情が厚く、皆ひとつの家族のように仲良く暮らしていた。

ここで私たちは昔から伝わってきた先祖の美風良俗を譲り受けた我が人民の美しい生活の姿を見ることができた。

私たちはそこの人民の真心こもった歓待を受けた。

彼らと私たちはすぐに一つの家族と変わらないぐらい親しくなった。

村のアナンネ（他人の家の婦女子の通俗的な呼び方）たちは毎晩私たち女性隊員が入っている家を訪ねてきて、人民に伝説のように伝わっているキム・イルソン将軍について、そして我が遊撃隊についてたくさんのことを質問した。

この時私たち女性隊員は男のトンムたちの下着を縫うのに休む間もなく針縫いを続けながら、彼女たちにたくさんの話をしてやった。

私たちが忙しく針縫いをするのを目撃した村のアナンネたちは、自分たちも手伝うから生地を裁断してくれと言った。

私たちは彼女たちの頼みを断れずに、比較的縫いやすいパンツの生地をたくさん裁断してやった。

ところが次の日約束した時間になってもアナンネたちは現れなかった。私たちが何時間もいらいらして待ったが待ちきれずに訪ねていこうとした時ちょうどアナンネたちが来た。

ところが彼女たちが苦労して作ってきたのはパンツではなくて別のものだった。よく見るとパンツに何か袖のようなものが付いていた。

「あら?!　これは何かしら?」
私は思わずこのように訊いた。
アナンネたちはただ訳が分からずにしばらくもじもじしてから、「それはトルチ（チョクサム。民族衣装で、ひとえの上着。形はチョゴリと同じ）です。でもそんなトルチは初めて見ますけど…」と言って言葉を濁してしまった。
彼女たちの話を聞くと、上の下着を作れというのだと勘違いしてシャツを作ってきたみたいだと思って、そのうちの一つを着てみた。
それは体に合わなかったばかりでなく両腕がまくれあがってとても格好がおかしかった。
「これはカプサンのトルチなの?」
トンムたちは余りにもおかしくておなかを抱えて笑いながらこのように訊いた。
ある女性たちは笑いをこらえながら、私たちが頼んだのは上に着る服ではなく、下にはくパンツだということをアナンネたちに説明してやった。
「せいぜい麻布のトルチだと思って、そんなものだとは知りませんでしたから。そんなもの見たことも聞いたこともなかったわ。…」
このように恥ずかしそうに答えて言葉を濁すアナンネたちの顔には悲しみが浮かんでいた。
人がこの世に生まれて当然着るべき服にどんな種類があるのかということさえ知らずに生きているのだということを考える時、どうして悲しくないことがあろうか。まして服の装い、

身の装いに気を使う若いアナンネたちではないか！

瞬間私はどこからともなく胸がじいんとなり、顔がぱっと赤くなるのを感じた。

この世に生まれて下着など着たことがない彼女たちだった。彼女たちにある服といえば体をやっと覆う程度のぼろ切れのようにすっかりすりきれた麻布のひとえものだけだった。激しい吹雪が吹き荒れる厳冬雪寒にも麻布のひとえものを着て暮らす彼女たちだった。それも二、三人の家族が一着を持って暮らす状態だった。父親が服を着て外に出かければ息子は服を着られないまま丸木小屋の中に閉じ込められていなければならない彼らだった。

ひたすら幸福を享受するべき子供たちの状態はいっそう惨めだった。分別がついて大人たちの仕事を手伝うようになるまで、彼らは冬でも夏でも一年中服など着てみることもなく裸で育った。学校などというものは知りもしなかった。

これが私たちが見た祖国のありさまであり、祖国を奪われた人々の辛い生活だった。

何のために、誰のために我が人民はこのように人間以下のさげすみを受けながら生きなければならないのか？

人民が脂汗を流しながら焼畑で作った一枡のじゃが芋さえ奪っていったのは誰か？

それは強盗日本侵略者だ。

この〈トルチ〉の中には笑いではなく、侵略者たちの抑圧と搾取を受けながら人間以下の生活をしていた我が人民の悲しみと恨みがこもっていた。

アナンネたちをしばらく黙って見守っていた私の目には、異国の地で生き長らえようとぼろをまとって夜を明かしながら麻糸をつむいだお母さん、麻糸巻きを抱えたまま目も閉じられずに飢えて亡くなったお母さんが見えるようだった。

瞬間私はアナンネたちをがばっと抱きしめた。そして一度に込み上げる悲しみをこらえきれずに泣き出してしまった。アナンネたちも女隊員たちも互いに抱き合って泣いた。

私たちはアナンネたちに強盗日本帝国主義者たちが朝鮮人民にあらゆる苦痛を与えているということ、侵略者たちに反対して闘わなければならないということを話してやった。

〈トルチ〉に関する話は瞬く間に部隊の全ての隊員たちの中に知られた。我が隊員たちは皆人民の不幸と貧しさを必ずなくそうという固い決意を再び固めた。

私たちは村を出発する時に余裕のある服はもちろん、着ていた服までも脱いで人民に分けてやった。

「お助けすることはできないまでも、どうして遊撃隊の方たちから私たちがいただくことができましょうか！」

人民はこのように言いながら受け取ろうとしなかった。

彼らがそうするほど私たちは彼らに自分の着ていた服まで脱いでやった。

「わしが嫁をもらう時もこんなに新しい服は着られませんでした！」

一人の老人は涙ぐんで、キャラコの上着を無理やり抱えさせてくれる遊撃隊員を長い間見

つめていた。

「良い世の中がきっと来ます。それまで長く長く生きてください！」

このように言いながら私たちは固く断る人民に衣服を抱かせてやった。

部隊が出発した日、村の人民は私たちが見えなくなるまで見送ってくれた。

悲運が垂れこめた祖国、奴隷の運命を強要されている人民と別れる私たちの心臓は張り裂けそうなほど痛かった。

（奪われた祖国を必ず取り戻そう！　このぼろをまとい飢えた同胞たちを必ず解放しよう！）

私たちはこのように固く心の中で誓いながら彼らと別れた。

ウァンウグの人民（3巻14話）

キム・ヂャリン

一九三三年初夏―この時期私が属していたヨンギル県の遊撃隊はウァンウグ一帯を根拠地にして活動していた。

この時遊撃根拠地内の革命大衆とその周辺の（敵統治区域に属している）人民はいつも我々の闘争を水火を辞さず援助してくれた。彼らはキム・イルソン同志が領導される抗日遊撃隊だけが、日帝とその走狗たちである搾取者たちを撃退して自分たちの利益を擁護してくれる

ということを悟ったために、心から我々に従い、また我々と一心同体となって日帝と闘ったのである。

彼らは自分たちが腹をすかせてでも遊撃隊を空腹にさせまいとしたし、自分たちがぼろをまとってでも我々を寒さから守ってやろうとした。日帝が成長する我々遊撃隊の力量に恐れをなし、ウァンウグ遊撃根拠地をつぶそうと毎日のように襲いかかってきた時にも、我々は人民の積極的な援助と支持のもとに士気衝天して敵を退け勝利した。

そのために我々はあたかも慈愛深い肉親の懐のような彼らの愛情と援助の中で、日帝を撃滅掃蕩する戦いの場で勇敢であることができたし、彼らの真の幸福と自由のために身を捧げることをこの上ない栄誉と考えた。

人民はいつも我々とともに—この確信はいつどこでも我々の心の中に抱かれている大きな力であったし、勝利に導く巨大な推進力だった。

ある日地方工作隊員たちから情報が送られてきた。それによれば、物資を満載した数十台の偽満軍の馬車がウァンチョン県の市街地に向かってヨンギル市を出発したということだった。

指揮部ではすぐに作戦計画を立てて出動命令を下した。

その時私は、七～八名の隊員を連れてクリョンピョンの後ろの高地に進出して防遮隊の任務を遂行せよという命令を受けた。

それは本部隊が馬車を襲撃する間、クリョンピョンの守備隊の奴らが襲ってこれないようにするためだった。

我々はすぐにクリョンピョンの方向の山の斜面に埋伏した。万端の戦闘態勢を整えた我々は、奴らの馬車が現れるのだけを待っていた。

当時我々には食糧が不足していたし、被服や履物が非常に少なかった。従って我々ばかりでなく、特に根拠地内の人民のためにもこの戦闘は非常に重要な意義があった。

(…人民に食糧を用意してやろう。そしてぼろをまとった子供たちに新しい服を着させよう！…)

我々はこのように考えながらクリョンピョンの山の曲がり角を注視していた時、急にそちらからぎいぎい音を立てる馬車の車輪の音が聞こえてきた。奴らの馬車だった。

馬車はだんだん我々が埋伏している丘の前に近づいてきた。馬車には荷が山のように積んであった。

そして馬車の合間合間には偽満軍の奴らが歩いていて、馬車の荷の上にも数名ずつ乗っていた。

ある奴は銃を握ったままこっくりこっくり居眠りしているかと思えば、ある奴はかなりいびきをかいていた。

我々は全神経を集中して襲撃班の銃声を待ちながら、防遮の任務を遂行するためにクリョ

ンピョンの前の山を注視していた。最後の馬車が襲撃班員たちの埋伏区域にほとんど入ろうとした時、「タン！」という銃声が響いた。襲撃班員たちの銃声と霹靂のような喚声が不意に起こったために、奴らは魂を失ってどうしてよいか分からずにうろうろするうちにその場で倒れたり逃亡してしまった。

この襲撃戦闘はわずか数分のうちに終わった。馬車襲撃班員たちはすぐに馬車をウァンウグの方へ引いていった。

この時銃声を聞いたクリョンピョンの守備隊の奴らが、予想した通り我々防遮隊が埋伏していた向かい側の高地に登ってきた。

奴らは山の尾根に機関銃を据えて、ウァンウグへの道筋に入っていく馬車に向かって猛射撃を浴びせ始めた。敵と我々との距離はわずか五百～六百メートルしかなかった。

敵の機関銃、歩銃の弾は馬車を引いていく襲撃班員たちの周囲に降り注いだ。

我々防遮隊員たちは直ちにむやみに銃を撃つ敵の機関銃に向かって一斉射撃を開始した。すると敵の火力は我々に集中した。奴らは自分たちの数的優勢を信じて執拗に抵抗した。

こうして敵と我々との間には熾烈な火力戦が展開された。敵の機関銃弾は道脇の岩に当たって石の粉を舞い上げたり、木の小枝を垂れ下げたりした。

（…我々がもしもここから一歩でも退いたならば、人民が渇望して待っている貴重な物品を奪われるかも知れない。

だから我々はどんなことがあっても最後までこの場を守り抜こう。奴らの機関銃弾をウァンウグに入っていく馬車の周辺に落とさせてはならない…）我々の胸はこのような一念に燃えた。

我々は奴らの猛射撃を遮りながら決死的に戦った。

このような間に数十台の六頭馬車はウァンウグの道筋に深く入っていった。

大きな道路からウァンウグまでは四里は優にあった。ところが大きな道からウァンウグの道筋に入る道は以前にならしてはいたが、数日前に雨が降ったので非常に険しかった。

この険しい道を物件を満載した六頭馬車の行列が入っていくというのは非常に困難なことだった。そして我々防遮隊のトンムたちが、狂ったように襲いかかるクリョンピョン守備隊の奴らを血でもって食い止めるそのような危急な瞬間なので、馬車を一秒も止める間もなく駆っていかなければならなかった。

遊撃隊員たちは馬車の前後に着いて引いたり押したりした。偽満軍の奴らに強制的に引っ張られてきた馬車夫たちも、遊撃隊員たちを助けてありったけの力を尽くして馬車を駆った。ところが馬車は思いとは異なってのろのろと動いていた。この時にウァンウグの入り口に住む敵統治区域の人民が駆けつけてきた。

彼らは山で、畑で働いていた犂をそのまま持って遊撃隊を助けるために飛んできたのである。彼らの中には老人たちもいた。

敵が乱射する銃弾が雨のように飛んできたが、彼らは自分の一身の危険を顧みなかった。もしも遊撃隊を助けたという事実が敵に知られた日には、自分の命ばかりでなく家族全員と家まで火の中に入れられてしまうということを彼らはよく知っていた。しかし人民はそれに構わず遊撃隊を助けた。

彼らはキム将軍が領導される抗日遊撃隊こそが、自分たちのように貧しい境遇にある人間のために戦いながら、日帝を打倒して我が国を独立させる真の人民の軍隊だということを信じ、それに希望を得ながら生きている人たちだった。

このような人民が遊撃隊が困境に立っている時に何をためらおうか！

馬車の周辺に銃弾がぶすぶすと突き刺さったが、彼らは馬車を押すのに余念がなかった。

馬車が水溜りやぬかるみにはまって動けなくなるたびに、人々は馬車を押し上げたり、山に登って木を伐って運び、女性たちは小川に下りていってチマに石をくるんで運んでぬかるみに敷いた。

人々の顔と服の裾には泥が跳ねて誰が誰だか見分けさえつかなかったし、服はずたずたに破れた。

陽はすでに西の山に傾き始めた。人々は疲れきっていた。しかし誰一人苦しいという一言口の外に出さなかった。

深いぐぼみに馬車がはまって脱け出せず、その上馬たちまで疲れて倒れてしまうたびに、

人民は駆け寄って馬車の荷物を一定の場所に背負って運搬した。

このようにしながら数里の山道を入っていかなければならなかったので、その難関というのは到底言葉で尽くせなかった。

馬車の隊列はコソントゥンの峠の下まで至っていた。コソントゥンの峠道は山の中腹をくねくねと曲がりくねって伸びていて、道の片側は絶壁になっていた。この峠の向こうまで馬車を越えさせなければならなかった。ところが遊撃隊員たちと人民の前にはより大きな難関が横たわっていた。

馬車がこの峠道に入れば敵と近い直線距離におかれるようになるので、道のついていないところを近道をして登っていかなければならなかった。ところがもう人々も疲れきっていたし、馬たちも力を出せなかった。

日はだんだん暮れていった。このような時にウァンウグ遊撃根拠地の人民がスコップ、ツルハシ、斧などを持って飛んできた。そして新たな気勢で近道をならし始めた。

切り立った絶壁の岩を崩して道を作ろうと火花を散らす人々、木を伐ってくぼみに敷く人々、険しい道に石や土を敷く女性たち…このようにウァンウグの人民は遊撃隊と一体となって近道をならした。

遊撃隊員たちと人民の一つに固まった力、屈することを知らない闘志と情熱の前にいかなる難関も克服できないはずがあろうか！　近道はならされた。馬車は峠の中腹を登り始めた。

「最後まで闘いましょう。今クリョンピョンの方では遊撃隊のトンムたちが我々の進む道を血でもって守ってくれています！」

「我々はさらに勇気を出しましょう。遊撃隊と人民の団結した力を示威しましょう！」

このように互いに鼓舞激励しながら遊撃隊と一体となった人民は坂道と闘った。

こうして馬車はコソントゥンの峠の上までほとんど登っていた。この時だった。馬車のうちの一台が後ろに下がり始めた。すると後から来た馬車もくっ付いて後ろに押されるようになった。狭くて険しい坂道なのでこれは実に危急なことだった。

人々は決死的に後ろへ下がる馬車にしがみついた。女性たちも馬の手綱を引っ張りながら鞭打った。この時一人の老人が後ろへ下がる馬車の車輪の下に身を投げた。するとたくさんの人たちがその老人の後に従って車輪の下に身を投げた。こうして危険は克服され、一つに固まったこの力の前に再び二本線の跡をつけながら馬車は坂の上に登り始めた。その時やっと老人は「そうだろうともさ。わしらが進む道を誰が邪魔できるものかね。」と大声で言った。

馬車はついにコソントゥンの峠の上に登った。

「やあ！」人々は互いに抱き合って歓声を挙げた。そして余りにもうれしくて馬の背中をなでながら喜び、若者たちは遊撃隊員たちを空中に胴上げしながら声高く万歳を叫んだ。

ある女性たちは喜びの余り涙をぬぐった。

我々防遮隊は任された戦闘任務が終わったので即時撤収せよという連絡を受けて根拠地に

帰ってきた。

我々が撤収して根拠地に来てみると、ろ獲した物品はすばらしく多かった。

粗織りの木綿、履物、小麦粉、薬品、発動機、鉄筋…これらの全ての物品は遊撃隊とウァンウグの人民が血でもって勝ち取った物品だった。

ウァンウグ遊撃根拠地は祝日のように活気付いた。生まれて初めて新しい運動靴を履いた児童団員たちが余りにもうれしくて遊撃隊員たちの首にしがみついて喜んだことが今でも私の目の前にありありと浮かぶ。

実にウァンウグの人民は遊撃隊に自分たちの全てを託し、遊撃隊のためならば命もためらいなく捧げた。彼らは遊撃隊と一心同体となって、艱苦で険悪な闘争の道でいつも勇敢に闘った。

このような革命的大衆に依拠し、革命的大衆から力を得ていたために、我々抗日パルチザンは十五星霜日帝と戦って勝利することができたのである。

不屈の闘士（特選集6話）

リム・チュンチュ

一九三八年十一月モンガン県ナムペヂャ会議があった直後のことである。

キム・イルソン同志の戦略的方針に従って司令部管下の各部隊は新たな闘争の道に進んだ。

警衛旅団の連隊長リ・ドンハク同志は約三百名の隊員たちと指揮員たちを率いて出発した。確固とした勝利の信念を持って険山峻嶺を越えて強行軍を続けた彼らが、ファヂョン県リュスハヂャ付近の密林で宿営するようになったのは、行軍開始から数日後の十一月三十日だった。

隊員たちと指揮員たちは皆動員されて深い雪をかき出して臨時に宿営する場所を用意してからテントを張った。しばらく後にテントの中には火が焚かれ、隊員たちは長い行軍の疲れをほぐし始めた。武器の掃除も終え、とうもろこしの煮たのをおいしく食べながら夕食を終えてから一晩ぐっすり休もうとした時、偵察小隊から急に敵情を知らせてきた。

わが軍が駐屯しているところから約一里半の地点で千五百余名の敵の大部隊が宿営準備をしているということだった。そして奴らは我が軍の行動の跡を探知するために山地の四方に散らばって回っている「精鋭」の機動部隊だということだった。

もしもそのまま夜が明ければ敵の大部隊の正面攻撃を受けるようになるだろうし、そうかといってあらかじめ敵を避けようとして、何日もの強行軍で疲れた隊員たちを引きずって再び行軍を継続するのも困難なことだった。

キム・イルソン同志が自ら育成した有能な指揮官の一人であるリ・ドンハク連隊長は、常にキム・イルソン同志の教えに忠実だったので、この日も危急な事態を迅速に解決するばかりでなく、むしろ敵に殲滅的打撃を与えることができる巧みな戦術を考え出した。

リ・ドンハク連隊長は敵を不意に奇襲して敵の主導権を喪失させ、我が軍が主導権を掌握することによって敵を束手無策〔どうしようもなくて手をこまねくこと〕にしてから殲滅してしまうことにした。

彼が不意の夜襲によって敵に対して先手を打とうと考えるようになったのも、寒くて暗い夜に険しい地形地物をうまく利用してひそかに敵の中に入って奴らの隊伍を混乱させた後、敵同士を互いに戦わせたキム・イルソン同志の卓越した戦術を学んでいたからだった。

彼はまず敏捷で大胆なマ・ヂヌトンムなど二十余名の隊員を選抜して軽機関銃とその他軽便な武装を携帯した二個の襲撃班を組織し、残りの隊員たちにはそこで休息を続けさせた。

連隊長は奇襲班を引率して自身が直接敵陣深く突入した。

このような我が軍の襲撃班の行動を敵は知るはずもなかった。

暗くて寒い夜で、深い谷間のうっそうとした樹林の中である上に、衣服と武装まで敵のものと同一に装ったばかりでなく、あまりにも泰然と歩いて入っていったので、敵の歩哨は軍号さえ訊かなかった。

しばらく後に敵の指揮部の近くに至った我が軍の襲撃班員たちは、瞬く間に有利な地形を選んで機関銃と歩銃で、各所に広がっている敵の宿営場所と指揮部のテントなどに猛烈な分担射撃を浴びせた。

不意の攻撃を受けた敵は、我が軍が陣中にいるとは知らずに急いで宿営地の外に飛び出す

と、射撃方向も定めず無秩序に乱射した。
敵は悲鳴を挙げながら群れになって倒れ、しまいには敵味方を区別できずにあちこちに走りながら自分たち同士で銃を撃ち合うなど大混乱を起こした。
このような中で機関銃、歩銃を持った数十名の敵兵が、我が軍の襲撃班員たちが埋伏している地点に飛び出してきた。
射撃を止めて敵の動静を探っていたマ・ヂヌトンムが連隊長に知らせながら軽機を構えた。
「もうちょっと待ちなさい。…奴らは我々を発見したわけではない。適当な掩蔽〔えんぺい〕。敵の砲弾を防ぐ〕場所を探そうと飛び回っているようだ。もうちょっと接近させてから撃ち倒せば武器も簡単にろ獲できるだろう。…」
その間に敵はさらに近づいてきた。マ・ヂヌトンムは沈着に敵を狙いながら命令を待った。かなり離れている焚き火の光で奴らの顔が現れるようになるや、連隊長は射撃命令を下した。時を逃さずにマ・ヂヌトンムたちは猛烈な射撃で瞬く間に敵数十名を撃ち倒した。そして軽機関銃二丁を始めとする多くの武器をろ獲した。
しばらくの間このように戦いながら敵を混乱に陥れて同士討ちをさせた我が軍の襲撃班員たちは、時間になったので適時に退却して、あらかじめ定めてある予備の集合地点に到着した。
我が軍が退却した後にも敵はそのまま長時間自分たち同士の戦いを止めなかった。夜が明けるころにやっと奴らは互いの撃ち合いを止めて、負傷者と死体を引きずって急いで逃亡し

てしまった。

そしてその日（十二月一日）朝九時ごろに敵の飛行機二機が飛んできて我が軍の方向に狂ったように低空射撃を加えた。しかしこのときパク・ソンチョル、キム・インムク中隊長たちは敵機に対する猛烈な集中射撃を命令した。ここで再び軽機関銃の名射手たちと歩銃狙撃手たちは、発狂的に襲いかかる敵機に対して猛烈な集中射撃を浴びせて敵機一機を撃傷させ、もう一機を撃墜した。撃墜された敵の飛行機は我が軍の上空で片側の翼を撃破されて約二里の地点まで行って凶悪な機体を地面に突っ込んで燃えてしまった。

ここで進められた一晩と一昼の戦闘で我が軍は飛行機を始めとする敵の戦闘機材に莫大な損失を与えたほか、五百余名の敵を殺傷する戦果を収めた。しかし我々はこの戦闘で惜しくも一名の戦死者と十五名の負傷者を出した。

私は当時地方党工作の任務を引き受けていく途中でこの戦闘に参加するようになった。そしてまず戦闘で負傷した危急な患者たちを治療してやることになった。もちろん私は医師ではなかったが、若い時に漢医術を若干学んだので、医師がいない条件の下で軍医官を兼ねて患者を治療することもあった。

私はこの日重傷者と軽傷者を分けて治療するために、二里の間隔をあけて密営を定めた。密営とはいっても松の密林の中に灌木で作った天幕を張り、その外側に松の枝をかぶせて昼間には敵機に発見されないようにし、夜間には焚き火を焚いて夜が明ける前に消してしまう

ことによって、敵の目を避ける程度だった。このようなところで私は彼らを治療するようになった。

数日後マ・ヂヌトンムも戦闘で重傷を負ってこの病院に入ってくるようになった。

マ・ヂヌトンムは左腕にひどい刀傷を負った上に右腕は完全に骨折し、大静脈まで切断されて非常に危篤な状態だったし、また酷い寒さの中で足の指五本は完全に凍傷にかかっていた。私が彼を訪ねていったとき、彼はひどい苦痛をこらえようと目をぎゅっとつぶって汗を流していた。よく見ると彼の腕と足の指は切断しなければならない状態にあった。しかしその場ですぐに手をつけるのは困難だった。私はまず彼に止血と滅菌消毒をするなど外部治療だけしてやると、腕と足の指を切断しなければならないという言葉は到底口の外に出せなかった。

「何とか切らずに治せないだろうか？…」

彼のそばを離れながら私はまた考えた。

しかし私はこの考えが無駄なものだとすぐに悔いた。

私は急いで引き返して彼を訪ねていった。そして腕と足の指を切断しなければ生命が危険だということを話した。

実際これだけのことを言うその短い瞬間が私にどれほど苦痛だったか、私は今でも忘れられない。

呻吟の中で私の話を聞いていたマ・ヂヌトンムが目をぱっと開けた。

そして静かに口を開いた。
「私が右腕を切ってしまえば死んだ命じゃないですか。」
そう言いながら目を閉じる彼の息づかいは荒くなった。しばらく後に彼は再び目を開けて話を続けた。
「…私が腕を切れば今後機関銃はおろか歩銃も撃てないし、手榴弾も投げることができないじゃないですか…日帝強盗の奴らをこれ以上倒せずに私が生きているならば、それは何の価値がありますか。私は共産主義者なのだから引き続き敵と闘わなければならないじゃないですか…それなのに私から腕を取ってどうしますか。」
このように彼は問いただすように私に反問するのだった。
「トンムの言うことはもちろん正しいし、革命の闘士らしい言葉です。」と言って私は彼を説得し始めた。
…トンムの腕はすでに脈搏が切れて腐り始めた。もしもこのままにしておくと生命が危険だ。それが分かりながらどうして黙過することができようか。…
革命のために必要な場合には最後の血の一滴までもためらいなく捧げること、これは我々の高尚な革命的義務だ。しかしぶち当たった環境と目の前にあることを冷静に考えずに、腕一本を惜しんで貴重な生命を失ってしまうということは、誤ったことではないだろうか?!　我々の革命は銃剣と手榴弾で敵を倒すことだけで達成されるものではない。腕がなくてもトンム

が今後やらなければならないことはたくさんある。…トンムの生命はトンム自身にとってよりも我が革命のために一層貴重なのだ…それなのにトンムが自暴自棄になって命まで捨てるならば、これは共産主義者として我が人民と我が革命の前にどんなに恥ずべきことか。…

私の話を黙って聞いていた彼は、急に私の膝に頭をこすりつけながらわっと泣き出した。

「自分の命を…そんなにも貴重だというならば、腕を切断しても革命のために闘うことができるというならば…どんな苦痛にも耐えることができます。…」

私は彼に興奮しないようにと言い聞かせて手術に着手した。

不完全な手術道具で極度に衰弱した重傷者を手術するということは、負傷者と医師の間に、どんな苦痛と危険も顧みずに生きなければならない、救わねばならないという強い精神力と責任感が一致しなくてはやり遂げられないことである。

しかしためらう時ではなかった。私はその場で彼の腕を切断した。手術を終えた後に私は彼の心臓の上に手を載せてみた。

ひどい苦痛をこらえながら口を閉じて横になっていた彼は、初めて目を開けてフウと息をつくと、若干体を動かすだけで何も言わずに静かに目を閉じるのだった。そして彼は次のように言った。

「ご苦労様でした。どうぞ体を少し休ませてください。…」

この時私はどのように返事をしたのか覚えていない。私は彼の胸から手を離して彼の布団

をきちんとかけてやった。

「ありがとう！…」

苦痛を知らないかのように泰然と横になっている彼の顔をうかがいながら私はこのように口の中で言った。実際その時これ以上に適切な言葉を見つけることはできなかった。

数日後に私は彼の凍傷にかかった足の指五本と左手の指数本をまた切断したが、その時は彼が逆に私を説得する立場だった。

「あまり残念がってはいけません。私の腕と足が全部なくなったとしても私は悲観はしないでしょう。もちろん一時的苦痛はつらいし、また今後不自由ではあるでしょうけど…しかし今のように私を世話してくれ、一緒に闘うトンムたちの中で生きるようにさえなるならば、私には何の心配もありません。私がこれまで生き抜いたことを考えると、どうも私は革命の成功を見て、解放された祖国で全ての人民が幸福に生きるのをきっと見るような気がします。もちろん私より何倍も何十倍も厳しい苦痛と死の困境をくぐり抜けてきたトンムたちはたくさんいますが、私も十三度も〈これでもうおしまいだな！〉と思いながらもさらに生き延びたのです。その中でも宗派主義者たちの手中に陥り、やっと死の境を脱して革命の隊列で再び戦うようになったことは、本当に一生涯忘れられないでしょう。」と言いながら、彼は私に次のような話を聞かせてくれた。

一九三三年夏のある日マ・ヂヌトンムはいわゆる〈民生団員〉という反革命分子の嫌疑を

受けて逮捕された。

当時東満では一部の宗派分子たちによって反〈民生団〉闘争が誤って進められるようになった。そして革命の隊伍を内部から瓦解させようとする日帝の離間策動にまんまとひっかかって、一部の堅実な革命の同志たちも〈民生団〉に加担したという〈理由〉で謀害、暗殺、拷問を受けた。

今もその時も宗派主義者たちは自分個人の私利私欲のために〈革命家〉の仮面をかぶって革命を抹殺するのにあらゆる手段と悪行を選ばなかった。

マ・ヂヌトンムは当時の所感を次のように語った。

「反革命宗派主義者たちは私を根拠もなしに〈反革命分子〉と規定して逮捕しました。私は悔しくも濡れ衣を着せられて殺害されるのだと思うと、あまりのことにあきれました。しかし私は堂々としていました。いったい私がどのように革命に背反したというのか？　私は私の良心に差し障ることはなかったし、堅実な我々の同志たちは私を信じてくれるだろうという希望を失いませんでした。

悲観失望して自暴自棄になってはならない。死んでも革命のために死に、生きても革命のために生きなければならないし、最後まで断固として闘わなければならないという自覚と勇気が炎のように起こりました。…」

そこで彼は共産主義者としての革命的気概を最後まで守ることを固く決心した。そして彼

は夜になるのを待った。
しかし彼は夜になる前に外に引き出されて山道を歩かされた。
「この時私は何を考えたでしょうか。彼らにそのまま引っ張られていけば、死ぬのが分かりきっていましたから。死ぬのが怖いのではなく、宗派分子たちによって〈民生団員〉にしたてられて死ぬのが悔しかった。私はあらかじめ考えていたとおりに死を顧みずに突っ走りました。どこまでどのようにどれだけ走ったのか分かりません。走っては倒れ、倒れては起き上がりながら山を一つ越えると、すぐに真っ暗になりました。…」
彼は山の中で夜通し深い考えにふけった。
「…いや、私はもう一度遊撃隊に戻らなければならない。隊列内に潜入した何名かの害毒分子のために私が遊撃隊から離れたならば、宗派分子たちは本当に私を〈反革命分子〉にしたてるだろう。…今私がもう一度戻っても彼らはもちろん私を殺そうとするだろう。しかし革命のために立ち上がった身が革命の隊列を離れては生きることができない。死んでももう一度隊伍に戻らなければならない。行って堂々と私の良心を吐露して闘ってみよう！…」
このように考えてその場から立ち上がって歩き始めた彼は、「死ぬならばいっそ敵と闘って銃の一丁でも奪って革命のために死のう！」という考えが不意に頭に浮かんだ。
彼はその道で山の下にある敵の自衛団室に向かって駆け下りていった。そして長い苦労の末にそいつらからとうとう五連発歩兵銃二丁を奪い、しばらく後にサンドマン遊撃根拠地を

再び訪ねてきた。

「もちろん私は遊撃隊に戻ってきても宗派分子たちの手にかかれば死ぬのは分かりきったことでした。…しかしその当時は五連発歩兵銃一丁あれば遊撃隊員たちは日帝の奴らの軽機関銃と互角に渡り合っていた時だったので、死んでも十分に血の代償を得られるので多少でも遺恨が晴らせると思いました。…そんな思いで私が戻ってきた時に私は驚きました。宗派分子たちはすでに打撃を受けた後で、この時には心から私を信じ愛してくれていた同志たちが私を抱きしめて泣くのでした。〈誰が君を民生団だといって君を逮捕したんだ〉、〈とにかく君が帰ってきて我々と会ったんだからうれしいよ！　うれしいよ〉と言って皆抱き合って歓声を挙げたそのことを私は忘れることができません。私が革命の同志たちを再び訪ねてこなかったならば、私はどうなっていたでしょう?!」

このように千辛万苦を味わったマ・ヂヌトンムは、その後キム・イルソン同志の領率下にあった警衛連隊の機関銃手となり、小隊長となり、キム・イルソン同志と全てのトンムたちのこの上ない愛情を受けた優秀な指揮官に育った。彼はソタンハ戦闘を始めとするたくさんの戦闘で軽機の名射手として偉勲をとどろかせ、リュスハヂャ戦闘に至るまでおよそ数百名の敵を殺傷し、敵機を撃墜したトンムだった。

彼は手術後にもよく次のような話をした。

「私がたとえ片腕を切断し、足の指と手の指数本を失ったからといって、私は生きて革命

を続けて革命の勝利を見るだろうと思うとうれしい。そして本当に私を愛してくれる同志たちの中にいるのだと思うと幸福です。…」

こんな話を聞きながら彼の片腕を見る私の目頭は熱くなった。

その上悪いことに薬もなく、糧食も解決できないので、彼に接するのにいっそう胸が痛んだ。とうもろこしの何粒かずつでやっと食事を続けながら三ヶ月間治療を受けた彼は、やっと歩くことができるようになった。

私は彼を連れて約一里余り離れたところに移動して、ほかの患者たちと一緒に過ごした。そして私がそこを出発する準備をしている時だった。

深い密林の中のひなたには冬の間中かぶっていた雪が解け落ちておにぐるみ〔くるみ科の落葉高木〕の芽が吹き始めた。そんなある日の九時ごろに敵〈討伐隊〉二百余名が我々の野戦病院であるこの密営を不意に襲撃してきた。我々は敵の機関銃射撃を避けながら運良く死境を脱出した。

私は彼を背負おうとしたが、彼は必死に私の手を払いのけながら、ぴょんぴょん前に飛んで樹林の中を抜けていくのだった。そして我々がその日の夜ある山の中で夜を明かすようになった時に、彼は私にこんなことを言った。

「朝鮮では花が満開でしょうね！」

「そうだな！　ここよりずっと暖かいし花や木も多いだろう。…」

このように言った私はすぐにのどが詰まった。このように天真爛漫で純朴なトンム！　傷ついた体で敵の不意の襲撃を受けたのに少しもあわてず、今ではとうもろこしさえも食べられないでいるのに、あらゆる困境と飢えに打ち勝ちながら祖国の春を恋したっている革命の同志に対して、私にそれ以上何を話すことができよう！

―革命闘争の過程でどんな難関と困境の中に陥っても悲観失望せずに楽天的に最後まで闘わなければならない。日本帝国主義強盗どもを打倒するまで健全な思想と火のような闘志で闘わなければならない。―

これこそがマ・ヂヌトンムの考えであり、行動の指針だった。

彼はたった今咲いた花のように若くて壮健な体格の持ち主からひどい不具者になったが、その後も依然として同志たちの前で常に快活だったし、自分の力の及ぶことならば率先して同志たちを助けてやった。そして彼はそれまで以上に学習に熱中した。左手で字を上手に書いた彼の姿が今でも私の目にはっきりと浮かんでくる。

任務を遂行するまで（特選集20話）

チャン・サンリョン

私が属していた部隊が北満のソンガン一帯で機動戦を展開していた一九三九年の初冬にあ

ったことである。
当時部隊の後方活動の責任を負っていた私は、キム・チェク同志の指示を受けてチョョン地方に小部隊工作に出かけるようになった。
それはまずチョョン地方の人民との連携を強化しながら、彼らを通じて冬の間に必要な食糧、弾薬、被服などを準備するためだった。
ところがチョョンに行く途中で敵の大部隊の追撃を受けて我々のトンムたちの一部が戦闘で負傷した。
私もこの時数ヶ所を負傷した。
しかし我々は傷を治療する余裕もなく、いかなる困難をも克服しながら負傷したトンムたちとともに目的地まで急いで行かなければならなかった。
それは当時敵の〈討伐〉作戦と〈集団部落〉に対する監視と捜索が甚だしかったので、途中でどの部落の人民にもうかつに接近できない状況だったからである。そこで我々は敵の追撃を受けながらも負傷したトンムたちに手を貸しながら困難な行軍を続けた。
我々が目的地であるチョョンの二里ほど手前のソンファ江のほとりに至った時だった。
敵が自動車に乗って我々を追撃してきた。
我々には避ける道がなかった。敵と戦いながら暗くなるのを待って川を渡る他になかった。
我々は秋収を終えた後にきびの茎を立てたままにしてある広い畑に入っていって急いで戦

壕を掘りながら戦う準備をした。
我々の人員がわずか数名にしかならないのを知って追ってきた敵は、最初から銃を撃たずに、「生け捕りにしろ！」と怒鳴りながら我々のいる畑に忍びこみ始めた。
我々は戦壕にうつぶせてだんだん近づいてくる敵を沈着に狙った。きびの茎があちこちに押しわけられる隙間から奴らの下半身が見え始めた時に我々は一斉に射撃をした。
奴らはきびの茎にさえぎられている我々の位置に気づくまもなく続けざまにぶっ倒れた。
前に立って入ってきた奴らが倒れると、後ろの奴らはしばらくざわめいていたが、それ以上入ってくることもできずにしばらく黙って立っていた。
我々もやはりきびの茎にさえぎられて敵の位置を知ることができなかったので、それ以上射撃をせずにひそかに場所を移した。そしてすばやく畑の畝間を掘り返して数ヶ所に戦壕を作った。
しばらく後に敵は再び接近し始めた。
先ほどとは違って今度は空砲を撃ってみたり、ある奴は叫び声を挙げたりした。
我々は敵の銃弾が飛び交う中でも沈着に敵の行動を探った。
我々が隠れている後ろのほうにも敵が忍び寄っていた。
我々も両方に分かれて伏せた。
やがてチュ・ソンヂュントンムの機関銃が猛烈に火を噴き始めるや、我々は歩銃と手榴弾

で敵に群れ死にを与えた。
敵も我々の位置を知るようになると前後から狂ったように射撃を始めた。
こうして敵の銃弾は我々を間において両方から飛んできた。
この時を逃さずに我々はきび畑の深い畝間を利用しながら横に逃れていった。
結局敵同士で戦わせて我々はきび畑の中にさらに深く入っていったのである。
しかしこのような方法だけでは敵に決定的な打撃を与えることはできなかった。
数量上で優勢な敵は群れ死にをこうむりながらも引き続き猛烈な射撃を浴びせながら我々にかかってきた。
力に余る苛烈な戦闘は続けられ、我々のトンムたちも一人二人と倒れていった。
しかしどのトンムもただで倒れはしなかった。
チュ・ソンヂュン機関銃手のそばにうつぶせて敵に手榴弾を投げていたあるトンムは、両腕をすっかりやられてそれ以上戦うことができなくなるや、手榴弾を胸に抱いたまま敵の中に飛び込んでいって最期を遂げることによって敵を群れにして倒した。
彼の最後は我々のトンムたちに敵に対する敵愾心をいっそう激発させた。
我々は一発の銃弾で二、三人の敵を撃ち倒す火のような闘志で戦った。
ところが敵は我々がいようといまいと構わず畑の畝間をことごとく縫うように機関銃を撃ち、手榴弾を撒き散らしながら迫ってきた。

このように二時間以上も戦うと、その広いきび畑も身を隠すところがなくなった。そればかりでなく我々には弾もほとんどなくなった。

「トンムたち！…」

私は一人二人と倒れるトンムたちを振り返りながら何度かこのように叫んだ。

しかしそれ以上私は何も言えなかった。ただ敵を倒して一人でも多くのトンムを救って任務を最後まで完遂しなければならないという一念に燃えていたが、前からかかってくる敵をさえぎる銃弾がないので激憤がこみ上げるのをこらえることができなかった。

チュ・ソンヂュントンムの機関銃まで弾がなくなり、彼が最後に敵を撃ちながらトンムたちを援護してくれていた拳銃の弾ももうなかった。

すると彼は、「生け捕りにしろ！」と叫びながらかかってくる敵の一人を拳銃の柄で殴り倒し、二番目の奴を抱きかかえたまま倒れるともう起き上がることができなかった。

私の銃にもわずか数発の弾しか残っていなかった。ほかの数名のトンムたちの事情も同じだった。

日はだんだん暮れていった。二、三十歩ほどの地点にうつぶせた人間と草株さえも見分けにくくなる頃に、我々は広い沼の近くに至った。

私はなんとしてもそこに行ってトンムたちを隠さなければならないと考えた。

いくらもない銃弾を惜しんで我々は暗がりの中で立ち向かう敵を撃ちながら沼に向かって

進んだ。
沼のふちに至った時私には銃弾がたったの一発しかなかった。
ところが真っ暗な中で我々の後ろについてくる敵の銃声は引き続き激しく聞こえてきた。
もうためらうことはなかった。私はそばにいた分隊長ハントンムを押しようにして急いで沼に入らせた。
「早く沼のふちにある木の下に隠れなさい。…」
そして私は敵を引きずって沼を回ろうと思った。
しかしたった一発だけの銃弾で敵を誘引するというのは無理だった。
やむを得ず私も沼に飛び込む覚悟をし、最後の一発だけの弾を込めて、暗がりの中から近寄ってくる敵を狙った。しかし私は万一の場合を考えてたった一発だけの弾を惜しまなければならなかった。
私も沼に飛び込んで木の下に隠れた。敵弾が飛んできて落ちるたびにあちこちで跳ね上がる水滴が顔にかかった。
しかし我々は一ヶ所にとどまっていることはできなかった。
我々は互いに手を貸し合って水ならば水、地面ならば地面を這い、かき分けながらひそかに前へ前へと進んだ。そのうちに我々は暗がりの中のどことも知れない斜面の下に転げ落ちた。気をつけてよく見ると、我々が転げ落ちたところは川の斜面だった。

（トンムたちは皆どうなったろうか？…）

敵がうろつきながらあちこちで撃つ呪わしい銃声だけで、どこにもトンムたちは見えなかった。川をかすめて吹いてくる初冬の冷たい風で水に濡れた体は凍りついたが、私は寒いのも傷の痛みも省みることができなかった。同志たちが恋しいという思い、敵を思い切り打ちのめすことができない悔しい思い、このような思いが炎のように胸の中にこみ上げて心を鎮めることができなかった。

しかし私は努めて心を落ち着けて考えた。

（それじゃ、我々二人だけになったというのか?!…いや違う。今ここにいるのは二人だけだとしても、我々には組織があり、たくさんの同志たちと人民がいる。

そうだ！　彼らを探して川を渡らなければならない。どんなことがあっても党が与えた任務を必ず遂行しなければならない！…）

このように考えながら私は地面に横たわっている分隊長の手をとって起こした。そしてせわしく息をつく彼に手を貸しながら、薄氷が張ったソンファ江の水に入った。

我々は互いに離れないように手を堅く握った。そしてだんだん深くなる水の中に入っていった。

ぱさっぱさっと割れる刃のような氷が足の傷に触れるのも、寒くてひもじいことも、水が深くなるのも省みるひまがなかった。ただ敵に対するこらえきれない憤怒で胸を燃やしなが

ら、屈せずに最後まで闘おうという一念だけだった。

「…サンリョントンムだけでも…きっと生きて…部隊を訪ねていってください。…」

我々が川を半分ほど渡って島のようになったある地点に上がった時、分隊長はやっとこんなことを言って気を失って倒れた。

私もぼおっとして冷たい地面の上に倒れている時に、誰か私を呼ぶ声が聞こえた。やっと目を開けてみると、チャン・ウォルリントンムが負傷した腕を垂らしたままやっと体を支えながら私のそばに近寄ってきた。

我々は互いに抱き合い顔をすり合わせた。

そしてまだ気力を取り戻せない分隊長を起き上がらせてまた歩き始めた。

我々が一歩歩けばそれだけ目的のチョヨンが近づき、任務を遂行できるというこの熱い思いは我々皆の同じ心情だった。

我々はすでに先にここに来ていたヤン・タルリョントンムとともにもう一名の隊員に会った。皆で五人のトンムが一ヶ所に集まったが、皆負傷した身だった。そしてどのトンムの銃にも皆約束でもしたかのように弾は一発ずつ残っていた。

彼らの銃を触ってみて弾を数えてみた私の胸の中からは頼もしさと新たな力が湧き上がった。

「…トンムたち！　最後まで任務を完遂しましょう！…続けて歩きましょう。…」

私はしきりに地面にひっくり返りそうになる体を起こしながらこのように言った。

ほかのトンムたちも各自必ず生きて闘うことができるという確信を持って互いに鼓舞しながら立ち上がった。互いに手を取り腕を組んだり肩を貸しながらやっと一歩一歩歩みを移した。

たとえ全身が水にぐっしょり濡れ、肉をえぐるような北満の初冬の冷たい風が傷に深くしみこもうとも、誰も呻吟の声一つ口の外に出さなかった。

このようにあらゆる困難に打ち勝ちながら我々は一度も地面にへたり込むことなくずっと踏ん張って明け方まで歩いた。しかし二キロにもならない草原をやっと歩いたに過ぎなかった。我々は再び川を一つ渡らなければならなくなった。

激しい川の水に打ち勝つだけの気力はなかった。そうかといってその場にそのままいることもできなかった。夜が明ければ敵に発見されるだろうし、発見されれば避けるところのない平らな草原だった。

しばし歩みを止めてどうしようかと我々が考えている時だった。川上の方から一艘の船が我々に近づいてきた。

その方を注視すると、十余名が乗れる船だった。艪をこいでいた船頭が我々の方を注意深く眺めると、二、三人が船からすっくと立ち上がった。そしてすぐに船先を我々のいる方に向けるのだった。

我々は皆黙って銃を取った。

私は「誰だ？…」と声を挙げようとしたが、なぜか声が口の外に出なかった。

「これが最後の戦いではないのか?…」とあるトンムが言うのを聞いたが、私はそれを否定も肯定もせずにただ船に視線を集中していた。

緊張した瞬間が流れた。船はだんだん近づいてきた。船から一人の人が「…もしもし!あんたたちはどなたかね?…」と先に訊いてきた。

我々は銃を握ったままにらみつけるだけで、何の返事もしなかった。

水際に着く前に止まってしまった船から一人が下りて先に薄氷をかき分けながら我々のところに歩いてきた。

その時やっと我々は彼らが敵ではないということを推察することができた。彼らはこの地方の船頭だった。

「…もしもし!…あんたたちはどなたかね?」

しばし歩みを止めてもう一度このように訊いた船頭は、「あっ! あんたたちは遊撃隊じゃないかね?!」

と言っては我々のところに急いで近寄ってきた。

「…これはどうしたことだね…」

船頭は我々の手を取り肩を貸しながら船のあるところに急いで戻った。

我々を船に乗せた後に船頭たちは、夜中に人家もないこんなところに立っている人だから何か気の毒な事情がある人か、遊撃隊だろうと思って、我々のところに近寄ってみたのだと

言いながら一生懸命艪をこいだ。
夜が明けるまで川を下っていった我々は、ある地点に至った。ここで我々は船頭の案内である家に入って横になった。
聞いてみるとここは我々が目的としたチョヨンと最も近い部落であったばかりでなく、ウァントンムが政治工作をしていた部落だった。そして我々を救ってくれた船頭たちもここに住む革命組織の成員たちだった。
我々はその後十五日ほどここで彼らの真心こもった看護を受けた。我々は治療を受けながらも地方組織を通じて人民との連携を強化し、部隊の越冬準備に奔走した。　我々はチョヨンにいる敵の状況を偵察して後方の倉庫の位置を確定する一方、ある程度健康が回復すればすぐに奴らの倉庫を襲撃する準備を整えることが必要だった。その中でも最も重要なことは我々の力量を強化する問題だった。我々は地方革命組織で活動する青年たちのうち三十余名の入隊志願者を受け入れて訓練させた。しかし我々に武器はやはり五丁しかなかった。
このような時にチョヨンに派遣されて活動していたウァントンムが、チョヨン城内の敵情を持って我々のところに来た。
城内には若干の偽満軍がいたが、それも我々遊撃隊がこの地方で〈完全殲滅〉されたという日帝の欺瞞宣伝を信じて極度に安逸に過ごしていた。
このような条件で我々が不意に襲撃すれば十分に敵を完全に武装解除し、城内にある敵の

機関と倉庫を占領することができるはずだった。
襲撃する前に我々はチョヨン城の内外を再び了解し敵情を確認した。その結果我々は少ない力量でも十分に戦闘の目的を達成できるという確信を持つようになった。それは敵がこの付近に遊撃隊がいないと思って正門の歩哨を一人だけ立てているに過ぎないからだった。
そのうえ裏側の土城は崩れたところまであって、そこからは座った人間の肩を踏んでも楽に越えることができた。
そして我々は工作員たちを通じて敵の指揮官の奴らと地方官吏の奴らがある宴会を準備しているということまでもあらかじめ知るようになった。
我々は奴らが酒を飲むその日の夕方にひそかに行動を開始した。
私とチャン・ウォルリントンムは城の下にトンムたちを接近させ、そこで待たせてから先に城内に入っていった。
敵の指揮官の奴らばかりでなく、兵卒たちもあちこちに固まって酒を飲んだりすでに酔ってひっくり返っていた。
私はチャン・ウォルリントンムとともに歩哨の武装を解除して軍号を探り出した。
やがて城の下で待機していたトンムたちを敵の兵舎に進入させた。
極度に放心して酒に泥酔した敵は我々の前で身動きできずに手を挙げた。
我々は敵の武装を解除してから日本の指導官二人を縛っておいて尋問をした。奴らの話に

よれば、倉庫の鍵を持っていた者が逃亡したというのだった。
我々は日本の指導官の奴らを処断してしまい、敵の倉庫と武器庫の扉を壊した。食糧、被服などはもちろん、武器庫には重機十丁、軽機一丁、拳銃七十丁、歩兵銃千余丁と弾数十万発があった。
敵の兵営を襲撃掃蕩すると同時に、我々はこの日一部の力量を派遣して警察署を襲撃し、監房の扉を開けた。そこには三百五十余名の罪のない人民が監禁されていた。
彼らのうちの青壮年たちは大部分が我々についてきながら、武器を取って敵と闘わせてくれと嘆願するのだった。
我々は彼らをその場で選抜して受け入れることもできたが、地方革命組織に対する人民の認識を高めるために、革命組織の推薦をもらってきなさいと言った。
こうして我々の隊伍は地方で入隊した人たちまで合わせて二百五十余名に拡大された。
ヤン・タルリョントンムが隊伍の責任を負うようになり、チャン・ウォルリントンムが政治指導員になった。
我々はもう部隊を訪ねていかなければならなかった。そのためには騎兵隊で行動しなければならないので、馬を準備する問題が提起された。
この事実を知るようになった人民はそれぞれ自分たちが農耕に使っていた馬まで引いてきて我々にくれようとした。

しかし我々は人民の馬を受け取ることはできなかった。我々は人民の真心に感謝はしたが、馬を接収することはできないと言うと、彼らは日帝の奴らが育てた馬二百頭がここの牧場にいるということを知らせてくれた。

こうして五十名を除いては我々のトンムたちの全員が馬に乗ることができるようになった。敵からろ獲した毛布を二枚ずつ畳んで馬の背に乗せ、ろ獲したそのほかの物資は全部人民に分けてやった。

そして武器と弾は敵からろ獲した四台の貨物自動車と三台の馬車に積んで出発した。

ところがこの時人民が我々の前をさえぎりながら、まだ五十名の我々のトンムたちが馬に乗れないでどうやって深い雪道を歩くのだというのだった。だから是非自分たちの馬の中から五十頭を借りてでも乗っていくようにというのだった。

我々は人民の熱い誠意をあらためて胸に深く感じながら彼らの馬五十頭を借りて乗り、皆一緒に部隊に向かって走った。

その後我々はタグミョというところで敵を襲撃して馬二百余頭をまたろ獲した。そして地方人民から借りて乗ってきた五十頭の馬は元通り返してやった。

行軍の過程で我々は激しい風に出くわした。道は雪に埋まり、電柱も倒れ、我々が荷物を積んでいった自動車も運転していくことができなくなった。

自動車を運転できなくなると、我々はそのたくさんの荷物を馬に分けて載せ、残りは背中

にしょって運びながら、とうとう目的地まで皆無事に到着した。
私はキム・イルソン同志が領導された抗日武装闘争の時期にあったこのようなことを感銘深く回想しながら、どのような逆境でも革命家的闘志と党員であるという高い自覚を失わずに闘うとき、克服できない難関などありえないという真理をもう一度胸に深く感じるようになる。

燃える復讐の一念で（6巻15話）

パク・ソンウ

「朝鮮人百名を殺せば、その中に少なくとも共産党員か共青員が一名はいるはずだから、ためらわずに殺せ。…」
これは朝鮮と東北の地を強占した日本帝国主義侵略者たちの奸悪な植民地統治の手法の一つだった。
特に一九三一年〈九・一八事件〉をでっち上げて東北の地を強占した日帝は、人民の革命的進出を圧殺するために、警察と憲兵、正規軍はもちろん、自分たちの走狗たちまで全て動員した。秋収、春荒暴動を前後して東満一帯の共産党員たちと革命的大衆に対する検挙、投獄、虐殺蛮行は、どの国の歴史にもめったに見られない残酷な様相を見せていた。

天人共怒の日帝の殺人鬼的蛮行は、形容しがたいほどの残忍な方法、手段でもって敢行された。銃殺、絞殺、生き埋めはもちろん、針金で鼻とてのひらを突き通して引っ張りまわしながら〈反共〉宣伝を行った。数十名も家の中に閉じ込めておいて火を放った。四肢を引き裂いて電柱にぶら下げて人民を脅した。

奴らの野獣的な本性は、東北一帯の革命的な農村と遊撃地区に対する〈討伐〉においてもはっきりと現れた。

日帝は狼の群れのように歩き回りながら毎日のように村落を襲撃し、目に付いた人間ならばそれが分別のない子供であろうと白髪の老人であろうと女であろうと手当たり次第に銃で撃ったり、銃剣で突き刺した。生きたまま何名も深い井戸の中に投げ込んだりもした。婦女子を陵辱し、青年たちを検挙した。検挙された人たちはひどい拷問を受け、ほとんど皆殺害された。

奴らの企図を知って人民が皆避難した村に行っては、「我々は百姓を殺す軍隊ではない。隠れていないで下りてきて農事もして暮らしも立てなさい。」と欺瞞懐柔策を用い、避難した人たちが部落に下りてきたところを皆殺しにしたりした。

日帝はこのように残忍で奸悪な敵だった。

多くの人民が千秋の恨みを抱いて敵を呪いながら息を引き取った。

東満一帯で敢行された日帝のこの呪わしい蛮行を文字で書き尽くすことはできない。

ただ私が抗日遊撃隊に入隊する前に直接目撃したいくつかの事実だけをここに書こうと思う。

一九三一年九月下旬、すでにヨンギルとウァンチョンを占領し、平和な村落に対する襲撃と放火を楽しみとする日帝侵略軍のある集団がソョンジプ江の川辺を襲ってきた。

ソョンジプ江の川辺には、もしかしたら生きる道があるのではという希望を抱いて朝鮮から渡ってきた農民たちが、地主の土地を耕しながら貧しい生活をしていた。私の叔父もここで暮らしていた。

村の入り口に入った日帝侵略軍は、自分たち同士で何かしゃべりながら大砲を据えた。まだ奴らの狼藉を経験したことのない農民たちは、やっていた仕事を続けた。子供たちはわいわい騒ぎながら遊びを止めなかった。日帝の侵略的本性を知らない人たちの中には、「我々には何の〈罪〉もない。日本が悪いとビラをまいたこともない。何のために我々に手出しをすることがあるか。日本は〈文明〉が進んだ国だというのに…」と考える人までいた。

やがて将校の一人が腹を突き出して現れ、「百姓たちはみんな避難しろ。大日本帝国軍隊が大砲の威力を見せてやる。」とどなった。

奴らといくらも離れていないところに群がっていた村の人たちが避難しようとした時だった。真っ黒な大砲の口からは粗末な農家を飲み下しながら火を吹いた。地面は地震でも起こったかのように震えた。村の人たちは初めての、それも不意に受けたことなので、その場にうつぶせているしかなかった。たくさんの農家がほこりを立てながら崩れ落ちた。

仲むつまじく食卓を囲んで昼飯を食べていた叔父の家の家族たちも家もろとも殺されてしまった。

侵略軍は威力でも見せつけるかのように、〈敵陣〉でも撃破するかのように騒いだり笑ったりしてやかましく騒ぎ立てた。

日帝は東北を強占した初日からこのように〈治安〉をした。

私はそのとき初めて日帝侵略軍の面をはっきりと見た。侵略軍は残忍な強盗の集団だということも直接目撃して知るようになった。

また日帝侵略軍の手中から我々の奪われた全てのものを取り戻そうと思えば、必ず奴らと闘わなければならないということを知った。

こうして村の青壮年たちは力を合わせて日帝と闘うことを決意した。

次の年のある日、私はキム・イルソン同志が領導される抗日遊撃隊に入隊するためにヨンギル県ユヂョンチョンに行った。ユヂョンチョンには数日前から奴らの武器を奪取する相談をしていたたくさんの青壮年たちがいた。彼らは皆敵に父母を虐殺された人、息子や娘を失った人、どんなに血汗を流しても到底生きていくことができずに闘いの道を選んだ人たちだった。

私が彼らの中に合流した日の夜だった。

日帝〈討伐隊〉と偽満軍警の奴らはユヂョンチョンを不意に襲撃してきた。村が襲撃されるや青壮年たちは樹林が生い茂った裏山に駆け登った。それは有利な地形を利用して岩石を転

がしてでも敵と最後まで闘うためだった。
まだ手に何の武もなかったので、正面衝突は不利だったのである。
日帝〈討伐隊〉と偽満軍警の奴らは、我々が隠れた山の尾根に機関銃射撃をしながらも、登ってくることはできなかった。
奴らは各農家を回りながら火を放った。
村は瞬く間に火の海と化した。
子供を探す女性たちの泣き叫ぶ声、母親を呼ぶ子供たちの泣き声、銃弾に当たって倒れる人々の悲鳴が聞こえてきた。
山の下のへんぴなところに一軒の草ぶき家があったが、奴らはこの家にも火を放った。ところが屋根がすっかり燃えて家の中にまで火が付いてやっと幼い男の子が一人飛び出してきた。
子供というよりはまさしく火の塊だった。子供は服に付いた火を消そうとくさむらの上に転がった。
人を捕まえるのに躍起になった奴らは、狂犬のように押し寄せてきてその子をぐるっと取り囲んだ。まだ敵をはっきりと知らない分別のない子供は、奴らのズボンの股をつかんで火を消してくれと哀願した。
しかし獣にも劣る奴らは、自分たち同士で笑い騒ぐと、子供を銃剣で突き刺して空中に持ち上げた。

「ウアッ！」という子供の最後の悲鳴が我々の胸を突き刺した。こぶしがぶるぶる震え、歯はぎりぎりきしった。

日帝強盗どもはそれでも飽き足らず、恐ろしく燃え上がる火の中に子供を投げ込んでしまった。

「ああ！　天は無情か！」

そばに立っていたキム老人ののどを詰まらせた声だった。

「こんなことを見て我慢できるか？！　俺たちだけ生き延びようとヒキガエルみたいに這いつくばっていられるか？！　ええ？！」

ウァンチョンで暮らしていた父親、母親、弟たちが虐殺されるやすぐにユヂョンチョンに来たリ・ヨンチャントンムが胸を叩きながら言った言葉だった。

奴らを一撃で打ち殺してやれないのが悔しかった。胸からは炎が起こった。

敵はユヂョンチョンだけでも数十名の女性と子供を殺害し、たくさんの青年と若い婦女を捕まえていった。

我々は生き残った村の人たちとともに罪もなく虐殺された数十名の死体を埋めた。家族と親戚、隣り近所の人を失った女性たちが地面を叩いて痛哭した。

気絶して倒れた女性たちもいた。

奴らが火の中に投げ込んだ子供の死体でも捜してみようと、棟が燃え屋根が崩れ落ちても

う火の塊と灰だけしか残らない家の跡をかき分ける子供の母親を敢えて目を開けて見てはいられなかった。

どんなに火をかき分けたところで死んだ子供が生きかえるはずがないことを悟ったその母親は、魂を失った人間のように座って遠くの山ばかり眺めていた。そうしながらもどこかで子供の声がすると痙攣を起こしたようにぱっと立ち上がっては、自分の子供ではないことを知ってまた座り込んだ。もう涙もかれてしまった。

その子の母親は、たった一人しかいない息子に食べさせようと隣の部落に米を借りにいっていたところを、この災難に会ったのだった。

すでに昼間が過ぎて村には暗闇が漂った。子供の母親は米のくり鉢を抱いて元気を出して立ち上がった。やがて彼女は飯を一鉢つくって我々のところに来た。

「どうぞ召し上がってください。山の人たちは食べなくては立派に闘えないでしょう。どうか仇を討ってください。このかあちゃんの恨みを晴らしてください。…」

彼女は我々に飯を勧めながら、木の枝をぽきぽき折って箸に使いなさいと回してくれた。

この飯を食べるべき子供はあの火の中で焼け死んだというのに、どうして我々がこの飯を食べることができようか！　一日一度の飯も満足に食べられずに闘いを準備していた我々ではあったが、この飯だけは食べることができなかった。胸からは熱いものがこみ上げた。

「東北の地に行けば貧乏を免れることができるというのでついてきたのに、あの子の父親

もここに来て死んで…もうこうして私一人だけ残ってしまった…かあちゃんとして胸がなお痛むのは、三歳の時から買ってくれとせがまれていたゴム靴をとうとう買ってやれなかったことです。」と言って彼女はすすり泣くのだった。

日本帝国主義者のためでなければ、どうして我々が見知らぬ異国の地に来てこんな不幸な目に会うというのか！

どれほど多くの朝鮮人民が代々住んできた故郷と祖国をあとにして血涙をこぼしながらアムノク江やトゥマン江を越えなければならず、古い麻袋で身を包み、草粥で飢えをしのがなければならなかったか、日帝の奴らの銃で撃たれ、火に焼かれ、銃剣で刺されて死んだ朝鮮人民の数はどれほど多かったか！

血には血で、死には死でもって復讐しなければならない。一人で敵ウェノムを百人、千人殺しても朝鮮人民がこうむった不幸の報復には足りない。

青年たちは槍と斧、棒を武器に日帝軍警と偽満軍警の奴らを叩きのめした。

親日地主と自衛団本部も襲撃した。そして我々の愛国者と人民を虐殺したその武器を奪った。

その後ユギョンチョンに集まっていた青年たちは、キム・イルソン同志が領導される抗日遊撃隊に入隊し、敵との闘いを通じて革命戦士として鍛錬された。

敵に対してはいささかの容赦もしなかった。

燃える復讐の一念で怒れる獅子のように突撃する我が遊撃隊員たちの銃剣の前に敵は完全

に度肝を抜かれた。

我々は罪もなく虐殺された父母兄弟妻子の復讐のために、奪われた故郷と祖国を取り戻すために十五星霜の長久な日々を闘い、奸悪な敵ののど元を何度も突き刺した。敵は我々とぶつかるたびに血を流して倒れた。

ついに日帝侵略者たちは敗北滅亡した。しかし凶悪な戦争挑発者であり、人間屠殺者であり、帝国主義の元凶であるアメリカ帝国主義侵略者どもが我が祖国の半分を強占している。

アメリカ帝国主義侵略者どもは南朝鮮を強占して植民地統治を実施しながら経済的隷属と略奪、破壊、民族分裂と戦争の挑発、虐殺蛮行など世に知られた犯罪という犯罪の限りを尽くした。

アメリカ帝国主義は南朝鮮で自分たちの統治が破滅の窮地に陥るようになるや、軍事政変をでっち上げ、いわゆる〈反共〉のスローガンの下に、軍事〈政権〉に居座った走狗たちを鼓舞し、日本軍国主義者たちを再び南朝鮮に引き入れながら、人民に最も横暴なファッショ統治と貧窮、無権利を引き続き強要している。

朝鮮人民はどの国の人民よりも不倶戴天の敵であるアメリカ日本帝国主義者たちの犯罪をよく知っているために、奴らを最も徹底的に糾弾すると同時に、奴らに反対して断固として闘争するだろう。

我々はこのように武器を取った（9巻8話）

リ・ヨング

毎年四月二十五日を迎える時、我々はキム・イルソン同志を先頭とした朝鮮共産主義者たちの指導の下に十五星霜にわたって進められた抗日武装闘争の歴史的行程に対して感慨深く振り返ってみるようになる。

私は抗日遊撃隊が創建された当時の全般的状況についてすべて語ることはできない。ただ私は自身が武器を取って闘争に立ち上がらなければならなかった経緯についてのみここで話そうと思う。

日帝が満州を強占した九・一八事変についてのうわさが我々の村にまで届くや、村中が極度の鬱憤に包まれざわめいた。この時隣の村に住むキム・ヤクチュントンムが私を訪ねてきた。彼はクサン村四十余戸の農家の中で高等科を出た唯一の人間で、私と非常に親しかった。

我々は夜遅くまで互いの心情を話した。

「…君の境遇を考えると全く言葉も出ないよ。今まで牛馬のように働いて苦労しながらどうにかこうにか命は支えてきたけど、これからの暮らしはもっとおぼつかない。

これからはお母さんと幼い四人の弟が君の一身にかかるのだから、年の行かないか弱い君

の体でどうやって家計を切り盛りしていったらよいか…」

キム・ヤクチュントンムはその間の私の生活状況を見て、人事ではないようにこのように心から同情してくれた。

しばらくこのような生活上の問題について話したキム・ヤクチュントンムは、まず九・一八事変についての話を切り出しながら私の考えを聞いた。

そうでなくても日帝の東北侵略と関連して、私は心の中に抱いていた考えを話したかったので、すぐに考えていたことをそのまま打ち明けた。

実際日帝の東北侵略は、東北の津々浦々の朝中人民の中ですべてそうだったが、私が住んでいた五号村でも大きな波紋を引き起こした。自分の国を奪われ北カンド（間島）に追われてきて、国民党軍閥と地主の奴らからあらゆる圧迫と搾取、民族的蔑視を受けている我々にとって、それは三重四重の奴隷になるということを意味していたのである。村中が鬱憤に歯ぎしりした。

老人たちは集まってはこのように痛嘆した。

「日帝の奴らに国を奪われ、慣れ親しんだ故国の山川から追われて、この山も水も慣れぬ地方に来たけど、また奴らがここまで追ってきたのでは、もうわしらはどうしたらいいんだ！」

女性たちは女性たちで、忘れられない故国の山川と故郷の人々の姿を恋しんで涙を流した。

これは私一人の鬱憤や我々の村の人たちだけの心情ではなく、全東北の朝鮮人の胸の中に

染み込んだ共通の鬱憤であり、恨みでもあった。
キム・ヤクチュントンムも激憤をこらえきれずに激しい語調で言った。
「考えてもごらん。いずれにしろ日帝の奴らがここまで攻め込むようになったからには、これから我々朝鮮人の運命はどうなるか？
異国の地で地主と国民党軍閥の圧迫と搾取にあえぐこの場に日帝まで攻め込んできて我が物顔でのさばるようになった日には、我々朝鮮人が生きる道は永久にとざされてしまうだろう。」
興奮と憤怒で彼の声は震えた。しかしヤクチュントンムもやはりどのように行動すべきかについては一言も言わなかった。
次の日も、その次の日も彼は私を訪ねてきて、我々は大体同じ内容の話をした。
ヤクチュントンムは四日目の日になってそっとこんな話を持ち出した。
「ヨング、どの道死ぬのなら、おれたち二人が一緒に立ち上がって、日帝と国民党軍閥と地主の奴らに反対して闘ってみないか？」
私はその言葉にはっと気をそそられて、
「うん！　だけどおれたち二人が闘うって、どうやって闘うっていうんだい？」とせわしく尋ねた。
キム・ヤクチュントンムは闘争のスローガンを書いて貼り付けることから始めようと言った。
その日の夜我々は、

「日本帝国主義を打倒しよう！」
「朝中人民の敵は日本帝国主義だ！」
「我々を苦しめる日本帝国主義と国民党軍閥を打倒しよう！」などのスローガンを三十余枚も書いて、五号村とクサン村を回りながらひそかに庭の中に投げ込んだ。
次の日の朝、村ではあちこちの家で、昨日の晩<共産党>がやってきたとひそひそ話をした。こっそりと行ってみると、老人たちはビラを読みながら、
「うん、その通りだ。みなただ死んだ振りばかりしているわけにはいかない！」と言いながら、こんな世の中はひっくり返さなければいけないと言った。
この光景を見た時、私の胸には痛快感と誇らしい気持ちが湧き上がった。
キム・ヤクチュントンムはおよそ一週間続けて訪ねてきた。我々は毎晩ビラを書き、私は五号村からヨンギルの方に行く一里半の峠と、クリョンピョンに行く道端の電柱に貼ったりし、村や道端にまいたりもした。
このことはずっと我々二人のほかには誰にも知られずに進められた。
一週間が過ぎたある日、キム・ヤクチュントンムはその間ビラを貼ってみての感想はどうだと聞くのだった。
「警官の奴らが〈共産党〉のビラが貼られたと騒いで回るのを見ると、本当に痛快だったよ。おれたちも何か革命家のようで…」

私は当時〈共産党〉や〈革命家〉が何なのかをよく知らなかったが、そのような話は聞いたことがあったし、また国民党軍閥がそのような人たちを最も恐れ憎んでいるということだけは知っていたので、このように答えた。

キム・ヤクチュントンムは私の話を聞いて非常に喜んだ。そしてまじめな顔をして言うのだった。

「ヨング、君もおれたちが何か革命家のようだと言ったが、実際革命家というのは特別な人間ではない。誰一人として母親の胎内から革命家として生まれた人間はいない。

革命というのはおれたちのように貧しい人間を苦しめる日帝と国民党軍閥、地主、資本家の奴らを叩きのめして、ぼろをまとい腹をすかせた人間がより良く生きる世の中を作ろうということだ。そのために闘う人間こそ革命家というものだ。」

彼は、我々を苦しめる日帝の奴らはもちろん、国民党軍閥と地主を憎み、奴らに反対しようというビラを書いて貼ったが、これを見た奴らが震えている反面、貧しい人たちはこれを見て、立ち上がって闘わなければならないという考えを持つようになるのだから、これこそ革命ということであり、したがって我々も革命家ではないかと言った。

彼は意味深長な微笑を浮かべると、再び話を続けた。

「今までは君にすっかり話してはいなかったが、もう全部打ち明けて話そう。

まさしく俺も革命をやろうと立ち上がった人間だ。

今すべての東北の地の鉱山、農村、都市、学校ではおれたちのようなたくさんの革命の同志が日帝に反対して立ち上がって闘っている。

ヨング、君も革命組織に入っておれたちと手を携えて闘わないか？…」

ヤクチュントンムのこの言葉を聞いた瞬間、堰が切れたように私の胸はぱっと晴れるようだった。

その後組織では私を正式に反帝同盟に受け入れたが、それは九・一八事変があってから幾日も経たない日だった。

後に分かったことだが、キム・ヤクチュントンムは早くから革命組織に参加して活躍していたトンムで、我々の五号村に組織の根を下ろそうと、実践闘争を通じて意識的に私を教育し訓練して組織に吸収したのである。

私はこのような内幕を全く知らなかったが、私が進むべき道はただ革命の道のほかになかったのでその道を選んだ。

私がそのように努めて求めようとした道――革命の道はまさに同じ境遇の人々が革命組織に結集して闘う道だった。結集して闘う組織があるのだと思うと、新たな力と信念が沸いた。

私は革命に参加するようになったことをこの上ない幸福と栄光に思い、たとえ死のうとも最後までこの道を歩もうと決心をいっそう固めた。

その後キム・ヤクチュントンムは、帝国主義とは何か、反帝同盟とはどんな組織で、活動

はどのようにしなければならないかということなどを具体的に教えてくれ、五号村で組織を拡大せよという任務を私に与えた。

組織に入り、また組織から委任まで受けると、私は限りなく誇らしかった。私は村を回りながらひそかに個々の人々の感情を探ってみた。皆「日帝に反対して打ち勝つことさえできたらどんなにいいだろうか。しかし我々は徒手空拳で、日帝の奴らはたくさんの軍隊と飛行機、大砲まで持っているのだから、どうやって打ち勝つことができようか」と言うのだった。彼らは皆闘いたい気持ちは十分にあったが、しばらく前の私の場合と同じように、闘争の方法を見つけることができずに迷っていた。

方法さえ教えてやれば皆闘争の道に立ち上がるように思えた。しかし一人ずつ深く了解して十分に教育し検閲してから受け入れよという組織の指示もあり、私はまずチョン・ウァンチュルという青年から教育して組織に受け入れようと決心した。カンウォン(江原)道地方のある貧農の家庭で生まれたウァンチュルは、幼いころから作男暮らしをしながら涙ぐましい生活をしてきた人間だった。

私はキム・ヤクチュントンムが私を組織に受け入れたように、実践活動を通じて教育し検閲して彼を反帝同盟に受け入れた。

次に農事を営むこともできずに塩売りをしてその日その日を生き延びていたリ・イチョン、他人の家の婿養子になっていたハン・ウンギュを受け入れ、続いて二ヶ月目には五号村のす

べての成人を残らず反帝同盟、農民協会、互済会などの革命組織に受け入れて全部落を革命化した。

我々の部落の農民たちが革命に進むようになったこの道は、まさに当時の東北一帯の朝鮮人農民たちの生活が要求した道だった。

異国の地で亡国奴の悲しみと搾取と貧窮の袋小路に陥ってあえいでいた人民は、座して死ぬよりもいっそ立ち上がって敵と闘わざるを得なかったのである。

こうして一九三〇年代の初めに東満一帯では力強い革命闘争の炎が燎原の火のように燃え上がり、それはついに秋収、春荒へ爆発したのである。

東満一帯の十余万の群衆を決起させた秋収暴動は、我々の五号村でも大衆的な革命的進出となった。

「日本帝国主義を打倒しよう！」

「反動地主を打倒しよう！」

「小作料は二・八制、あるいは三・七ないし四・六制を実施せよ！」

村中の人たちがこぞって立ち上がり、全ウィラングの革命群衆と勢力を合わせてスローガンを叫びながら、地主の奴らの倉庫を押し開けて小作人たちに米を分けてやった。そして次の年の春の春荒暴動の時には、日本の警察や保衛団などの日帝の走狗の奴らと赤手（徒手）空拳で闘いながら、クサン村のメン某、ナミャン村のチェ某のような親日地主の奴らの穀物

を没収して朝中の貧農民たちに分けてやり、日帝の走狗たちを処断する熾烈な闘争を展開した。
大規模な秋収、春荒暴動を通じて我々は団結した力の威力をはっきりと体験し、団結して闘えばどんな強敵にでも十分打ち勝つことができるという確固とした信念を持つようになった。
反日革命闘争の昂揚にびっくり仰天した日帝は、大兵力を動員して男女老少を問わず人民を手当たり次第に検挙、投獄、虐殺し、家に火を放つなどの鬼畜のような蛮行をためらいなく敢行した。
新たに生じた情勢は、より積極的な闘争形態に移行することを要求し、残忍無道な敵の弾圧に抗拒する人民の胸の中には
「血には血でもって報いよう！」という闘志が沸き立っていた。
まさにこのような時にキム・イルソン同志は、新たに生じた情勢と朝鮮革命の諸条件を科学的に分析し、武装闘争を展開することについての賢明な方針を提示された。
…我々が武器を取る問題はたやすいことではない。しかし今日生じている情勢は、我々に武器を取らざるを得なくした。
これは朝鮮人にだけ限った問題ではなく、我々と同じ境遇にある中国人民の前にも厳粛に提起された問題である。朝中人民は団結して日帝を打倒しなければならない。
武器ならば武器、金ならば金、そして我々のある限りの力を合わせて総動員で闘わなければならない。

座して嘆いたり、敵の鬼畜のような蛮行を見てわめきたてるのでは問題は解決しない。我々は立ち上がり手に武器を取って闘わなければならない。…

キム・イルソン同志のこの言葉は、東北に居住する朝鮮人民の心臓を限りなく突き動かし、彼らに闘争の前途を切り開いてくれた。

我々はキム・イルソン同志の言葉に従って武装闘争の道に立ち、武器獲得のための血みどろの闘争を展開した。

こうして金物と炭を担いで山の中に入って槍と短刀を鍛え、それを元にして敵の武器を奪い取った。クサン村の大地主メンの家を襲撃しては六丁の歩銃と一丁の拳銃、一千数百発の弾を奪い、チュフン公安局派出所を襲撃しては七丁の歩銃を奪取した。その他に多くのトンムたちが個別的にあるいは集団的に奴らの武器を奪った。

このように血と犠牲を伴う闘争を通じて我々は手に武器を取るようになった。

一九三二年四月二十五日にはキム・イルソン同志の直接的な指導の下に、朝鮮人民の革命的な初の武装隊伍である抗日遊撃隊が創建され、続いて我々のウィラングにも遊撃隊の一隊伍が結成された。

キム・イルソン同志を先頭にした朝鮮共産主義者たちの指導の下に、十五星霜にわたって展開された抗日武装闘争は、日本帝国主義者たちに甚大な打撃を与えたばかりでなく、朝鮮人民を勝利に導いた。